

## 第45回千葉県歴史教育研究集会(千葉集会)を終えて

榎澤和夫(事務局長)

1月28日、29日に千葉大学教育学部(千葉市)を会場にして開催された、第45回千葉県歴史教育研究集会(以下千葉集会)は、夏の全国大会千葉大会のプレ大会と位置づけて取り組みましたが、152名の参加を得て成功裏に閉会しました。みなさまのご協力ありがとうございました。

2月県委員会での総括をふまえて、今年の千葉集会の成果と課題について述べたいと思います。まず参加者動向ですが、参加者総数152名は、前回の全国大会千葉大会が開催された1994年(会場:千葉県青少年女性会館)の164名に次ぐ参加者でした。プレ大会として位置づけ、取り組んだ成果があらわれたといえますが、決して楽観できる数字ではありません。

参加者が増えた最大の要因は、学生・大学院生の参加が急増したことにあります。学生・大学院生の参加は、昨年25名から61名へと増え、参加者全体の40%を占めました。参加大学も昨年の7大学から12大学へと増加しています。また、ボランティアスタッフとして参加した学生・院生は46名にのぼっており、これは昨年に引き続き大学の教員となっている歴教協の会員が積極的に声をかけた結果です。ボランティアスタッフとして参加した学生たちは、会場設営や道案内などに積極的に関わってくれました。千葉大会では千葉大学が会場となるため、千葉大学教育学部の学生へのボランティアの呼びかけも積極的におこなっていきたいと考えています。

市民参加は36名で昨年より13名増加しましたが、教員参加は昨年の48名から51名の微増に止まっています。現職教員の参加が少ないことはここ数年の傾向でしたが、特に小学校、中学校の現職教員の参加が低迷しており、千葉集会では、小学校が7名、中学校は3名のみが現職参加でした。小中学校の職場では若い教員が増えている状況が続いています。千葉大会に向けて若い現職教員に参加を促す具体的な方策を考えていかなければなりません。

ワークショップは今回も好評でした。前半はショップごとに説明の時間を設け、全てのショップ担当者の話が聞けるようにし、後半は自由に参加できるという形態にしました。6回目

### 千葉県歴教協の集大成が

### 1枚のDVD(2011年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2011年改訂版」)は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならぬと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返し、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

---

を数えるワークショップですが、各ショップの内容に変化は見られるものの固定化しているのが現状です。新たな出店のあり方を考えていきたいと思えます。また、千葉大会に向けてどのようなワークショップのあり方が可能なか早急に詰めていきたいと考えています。

地域実践報告は、「子どもの生活に根ざした授業で社会科の学力を育む一映画『蟹工船』を使った高校日本史授業一」と題して、千葉支部の浅尾弘子さんが報告しました。内容は一昨年の千葉集会地域実践報告をベースにして、千葉大会の閉会集会でされる地域実践報告を念頭に置いたプレ報告と位置づけて報告してもらいました。いわゆる教育困難校での実践ですが、その実践の「凄さ」は生徒の授業評価に如実に表れています。

「教えられて知るのではなく、自分で調べたり、人の発表を聞いて自分の考えを述べ、自分で感じ取っていく授業だと私は思った。この授業ではこれから役に立つことがたくさんあると思う。まず調べ学習においては自分から取り組むということを身につけられる。それから人の発表を聞くことで、人の話を理解しながら聞くことができるようになる。最後に自分の考えを述べて自己主張できるようになる。こんな要素があると私は思います。」と生徒が述べています。

浅尾さんは社会科の基礎学力を「わからないことを調べる力、思考を深める方法を知る力、お互いの人格を尊重しながら意見をたたかわせることの意義を知る力、自信を持って行動するため権利や制度を確認できる力」と規定し実践に取り組んでいますが、生徒が身につけるべき学力とはなにかということを改めて考えさせられました。大学入試を意識しつつ、限られた授業時数のなかで、進度に気遣いながら授業を進めている「進学校」こそが、教育困難な状況に立ち至っていることがよく分かる報告でした。

記念講演は、「子どもと地域に根ざす千葉県歴教協の活動のめざすもの」と題して、愛知県立大学の久保田貢さんをお願いしました。千葉大会を前にして、前回千葉大会以降の千葉県歴教協の活動を客観的に評価してもらおうということで、久保田さんには事前に2000年以降に発行された千葉県の会誌をお渡ししました。久保田さんは会誌に掲載された112本(!)の実践に目を通し、「地域に根ざす」「子どもに根ざす」千葉県歴教協の活動を丁寧に分析してくれました。「地域」の問題に関しては、社会学の知見を踏まえながら、外国人や日雇い労働者、定住しない流動的市民の存在など、地域は多層的・重層的に人々が存在する場所であること、そして定住を前提とした地域に生徒を固定化し、その地域の主体として位置づけることは非定住者などを排除する危険性があると指摘しました。根ざすべき「地域」を今まで漠然と捉えていたのではないかと反省させられました。

「子ども」の問題に関しては、「話しあい」「討論」に千葉県歴教協の授業実践の最大の特徴があると指摘し、話し合うことで孤立・分断化された人間関係に「つながり」が構築され、教室空間が真理を探究する学びの場と変貌をとげていると評価しました。千葉県歴教協の授業実践が、人間を競争させ「価値ある生」と「無価値な生」、「能力ある者」と「無能力者」とに区分し価値序列を確定していく新自由主義の理念とは対極にあることを再認識しました。

2日目の分科会には、6分科会で122名(去年は89名)が参加しました。32本の報告が行われ、そのうち26本が全国(千葉)大会へ推薦されました。今回は若手の教員や学生に報告してもらうことを念頭においてレポートを組織しました。その結果学生・院生の報告が6本、初任者の報告が2本となり、若い参加者の共感を得ました。また「3・11」以降、原発やエネルギー問題に関わる授業実践が目立っていますが、千葉集会では原発関連の授業実践が3本報告されました。集会参加者が増えたことにより、分科会参加者は数年ぶりに100名の大台を越えましたが、会員の参加は47名で昨年と同数に止まっています。千葉大会では各支部がそれぞれの役割を分担しますので、支部会員の結集がなにより重要です。特に「地域に学ぶつどい」は、支部＝地域の人たちをいかにして参加してもらうのが課題になると思われます。各支部での取り組みをよろしく願います。

さて、全国大会千葉大会での千葉県歴教協の取り組みの成果が試される次回の集会は、地域に根ざす活動で全国的にも注目されている“安房”で開催します。安房での開催は17年ぶりとなります。会員のみなさまのより一層のご協力をよろしくお願いいたします。

---

## 千葉集会分科会のまとめ

### □小学校分散会Ⅱ

提案レポートは以下の通りである。

- ①三箇昭子(千葉支部)／風呂敷は世界をめぐる一ケニア、韓国、トルコ、ブータン(小3)
- ②酒井加代子(松戸支部)／坂川の昔、今一私たちの暮らしを支える土地と水を治める闘いの歴史(小4)
- ③山寄早苗(千葉支部)／いのちを学ぶ獣医師と一緒にふれあい実習
- ④江崎広章(千葉支部)／丹後堰の授業(小4)

三箇報告は、風呂敷を切り口にして国際理解に取り組んだ実践の報告である。唐草模様の風呂敷を見せることから学習に入り、いろいろな物の包み方を体験させ、子どもたちの疑問から、①風呂敷はいつ頃から使われたのか、②他にどんな包み方があるか、③どんな大きさ、形のものがあるか、④他の国にもあるのかという学習課題を立てて調べ学習をしている。④では、ケニア人女性を教室に招いて、ケニアの「風呂敷」カンガについて学び、その後、トルコ、ブータン、韓国の「風呂敷」を使っている写真や実物を見て用途について話し合い、日本の風呂敷との共通点「包む」「運ぶ」「心を伝える」に目を向けるようにした実践である。

色鮮やかで蔓草模様のついたカンガ(ケニア)、美しく、四隅に房のついたポジャギ(韓国)の実物を示しての報告は分散会参加者にとっても心が浮き立つものであった。

討議では、アジアだけではなくアフリカにも「風呂敷」があることに着目したことや、ゲストティーチャーの話聞くだけでなく、ゲストティーチャーに日本の風呂敷について伝えるという学習活動をとっていることなどが高く評価された。学習の入り口で「なぜ風呂敷なのか」を子ども自身が意識できるようにすることや学習の出口で「どのように子どもが学びを表現するか」などが今後の実践の課題である。

酒井報告は、地域を流れる坂川を教材化し、江戸時代に水害を防ぐために行われた流路変更工事から現代の河川再生事業までを取り上げ、社会科と総合学習で取り組んだ実践の報告である。坂川が流れるこの地域は、江戸時代に新田開発された低湿地である。大雨が降ると坂川が流れ込む江戸川の水位が上がるため、逆流による洪水にしばしば見舞われた。それを解決するためにより下流に流す流路変更工事を行いたいという村人たちの願い、幕府への願い出、流路変更によって不利益を被る下村との争い、和解などの歴史があったことを前半で探究し、後半では、明治以後の坂川と人々の暮らし、特に1950年代以後の川の汚れと、それを解決するための国、県、市の事業について坂川パンフレットなどを利用しつつ探究し、学んだことを劇にして上演している。

討議では、地域の何の変哲もない小河川に刻まれた民衆の歴史と現代の問題を時間をかけて探究したこと、学ぶ子どもの姿から保護者も関心を持つようになっていくこと、最後に劇として表現していることなどに共感が寄せられた。子どもたちが意欲的に探究した姿がそこに見られたからである。

山寄報告は、大学の生活科関連科目「飼育栽培」で動物とのふれあい実習を行った実践の報告である。獣医師を教室に呼び、「園・小学校での動物飼育の意味と留意点」について話してもらい、チャボとウサギを抱く体験をして、学生たちの意識は大きく変容している。人が動物を怖がっていると動物も人を怖がるのがわかり、小動物を飼うことは人間を理解するためだったのだと気づくのである。学生は自分自身が動物とのふれあい体験をすることで、飼育活動が子どもたちに与える教育力の大きさを実感している。

討議では、教育現場で飼育活動をする重要性について多くの意見が出された。死に触れること、糞尿など汚いものを始末することなど、今の子どもたちの暮らしから遠ざけられていることだが人が育つ上で大切なことである。小動物を飼う中でこうした体験が得られる。忙しい教育現場で動物を飼うのは大変であり、また、伝染病やアレルギーに対する保護者の心配もあり、教師は消極的になりがちであるが、獣医師に相談したり、休日に動物を希望者の家に預けるホームステイ方式な

---

どの工夫をすることで学校の負担が軽減されたり、子どもたちの動物とのふれあいが深められたりすることが話された。

江崎報告は、江戸時代に堰と用水路をつくり、新田開発を行った布施丹後を取り上げた実践報告である。当初、20時間程度で予定していた授業は、10月から3月まで50時間以上も続いた。小4の子どもたちが長い期間、意欲的に学んだ理由を授業の進め方とともに分析している。江崎さんが授業で大切にしているのは、子どもたちが自分で考えることである。そのために都川周辺の地図を見せ、等高線に注目させたり、洪水で泥をかぶった稲のビデオを見せたり、堰と用水路の位置を考えるワークシートを用意したり、子どもが具体的なイメージを持って考えられるような様々な方法をとっている。子どもたちが注意深く資料を見る目が育っているのも、布施丹後墓地の顕彰碑と丹後堰公園の説明文と副読本の文面では工期が食い違っていることに気づき、真相を巡って議論をするのである。教師が教え込むのではなく、子どもたちの問題解決に必要なとあれば人を呼んで（電話をして）話を聞く姿勢なので子どもたちは更に考えるのである。長い時間考え、話し合いをした学習なので、最後につくったカルタには当時の人に共感する気持ちがこもっている。

本分散会で提案された報告と討議で言えることの一つは、中学年の子どもたちが物事を細かく見たり、関連づけて考えたりできるようにするためには、子どもたちの中に具体的なイメージが形成されなくてはならないということである。それは、作業体験であったり、人との出会いであったり、現地踏査であったり、映像であったりするが、具体的なイメージができる中で子どもたちは問題意識を持って動くようになっていく。

また、表現活動の持つ重要性も確認できた。自分が理解したことを相手を意識して伝えようとする活動は、子どもたちが考えを深める契機にもなっている。大切なことは、作品のでき映えや表現方法ではなく、子どもの気づきが表現されているかどうかである。子どもの学びを検証する上でも重要である。（文責・木村 誠）

#### □日本分科会

- ①渡辺哲郎／近世に生きる人々を考える授業—熙代勝覧を素材に
- ②筑波大学院生／模擬授業・中世の神判
- ③法政大学院生／共同する社会科—加藤実践における生徒と教師の主体性
- ④神山知徳／戦争体験・戦後体験の聞き取り調査とレポート作成をどう指導したか
- ⑤華山泰／試行錯誤の1年、そしてこれから—県立高校で地理を教えて

日本分科会は参加者38名と大盛況でした。午前中は3本のレポートを検討しました。渡辺報告は、19世紀初頭の日本橋付近の風景を描いた絵画資料・熙代勝覧を素材にして、近世社会に生きる人々について考えさせる授業です。ユニークなのは渡辺さんの発問です。「この絵のなかで一番ハッピーだと思う人、二番目にハッピーだと思う人、そして一番アンハッピーな人を探して、その理由を挙げよ」というものです。多くの事物が描かれた史料なかから「人」に注目させ、さらに次の発問で「アンハッピーな人はどういう人で何をしているのか」と近世の職業や身分に焦点を絞っていくしかけになっています。生徒たちが「この人は本当にアンハッピーなのか？」と疑問を持ったために、渡辺さんの思惑通りに議論が進まないのですが、アンハッピーの基準が現代と違うことに気づいた生徒は、近世とは何かを考え始めています。参加者からは、作者や描かれた目的など不明点が多く、史料として扱うには課題が多い。日本橋という町の特徴や町割りに注目させてもおもしろい発見ができるのではないかという意見が出されました。

筑波大学院生は、御成敗式目の模擬授業（対象は高校2年）を行いました。従来、理非に基づく裁判制度を実現したと授業で紹介してきた御成敗式目ですが、当時の人々の法意識にまで踏み込んで式目成立の意義を考えようという意欲的な実践プランです。密通事件の容疑者が起請文を書いて神社にこもり、7日間何も起きなかったので無罪になったという事例を紹介し、証拠主義をとっていたはずの式目に、なぜ神判の規定があるのかを考えさせます。現代の私たちには理解しがたい「神判」から中世の人々の法意識に迫ろうというのです。結論は、個人の権利保護よりも共同体の秩序維持が優先されるという抽象的なもので、はたして高校生が納得するか疑問は残りましたが、現在と過去の対話を生徒一人ひと

りにさせることをねらいとしていて、千葉県歴教協の実践にも通じる手法がとられていて、たいへん刺激的でした。

法政大学院生の報告は、加藤公明氏が「生徒を主体とする」という場合の「主体」とは何かを、ミシェル・フーコーの理論を手がかりに分析したものです。フーコーの主体論の特徴は、人は権力の作用を自らに及ぼすことで自己を変容させ「主体」となるのですが、その際どのような力が人を「主体」にするのかに注目するところにあるようです。近代社会がつくり上げた、規格化され逸脱のない、互いに均質な、しかし「客体」化された個を、教育現場において「主体」にする契機は、「生徒がそれぞれ異質な様が際立つような授業を組織する」ことだと報告者は考えます。そして加藤氏が討論授業のなかで強調する①論理性、②実証性、③オリジナリティのうち、③の部分に注目し、授業記録から生徒が「主体」として立ち上がってくる部分を析出しました。さらに、「主体」化を促す加藤氏自身もまた主体として生徒たちと向き合うことで、自己と他者をより解放的な関係性に導いている点に注目しています。

午後は2本のレポートを検討しました。神山さんは、2001年から、高3生(2003年から中2生も)に祖父母からの戦争体験などを聞き取る活動をさせています。他者とのかかわりを避けようとする子どもたちに生きた歴史を学び取らせる機会として取り組んだ実践です。冬休みの課題として調査をさせますが、その際①話者の名前、②生年月日、③自分との関係、④話者が少年期・青年期を過ごした場所を明記させます。冊子は毎年きちんと製本し、全員のレポート抜粋を「戦前の暮らし」「従軍経験」「東京大空襲」「終戦直後の暮らし」などの表題をつけて分類・掲載し、巻末にすぐれたもの数本を全文紹介しています。この実践が優れているのは、子どもたちが先輩のレポート集を見て、素材の収集(聞き取り)→聞き取り内容の編集・資料化(聞き書き)→聞き書きをもとにした歴史叙述(オーラルヒストリー)と年々内容を深化させているところです。調査前にわかりやすいVTR「少女たちの日記帳」(NHK)を見せた効果も大きいと思います。参加者からはレポートの評価について質問がありました。子どもたちの作品をどのような基準で評価すべきか、彼らが学習の主役になればなるほど大きな課題になっていきます。

華山さんは、大学院から教職正式採用までの苦節6年の「歴史」と自己分析を中心に報告してくれました。千葉県は臨任講師を同じ学校で2年続けられないというシステムをとっているために、彼はほぼ毎年異動を繰り返し、慣れるだけで精一杯の1学期末に採用試験を受けるという悪条件のなか頑張ってきました。毎年自宅から遠い学校からオファーが来ることもそうですが、教職希望者に踏み絵を踏ませるような仕打ちをする教育行政の悪質さにはうんざりします。しかし彼がこれを耐え抜いたのは、おそらく子どもたちとの新たな出会いに助けられたからではないでしょうか。これから教職をめざす学生にはディープな内容でしたが、こうした厳しい現実のなかで何をよりどころに教師の仕事をするのか、非常に示唆的な報告だったと思います。

若い参加者が積極的に質問や意見を出してくれたので、たいへん活気のある討議ができました。その分ベテラン勢が抑制的だったので、ぜひ、今後も若い報告者たちによきアドバイスをお願いします。

(文責・柄澤 守)

## □世界分科会

参加者は、のべ25名でした。今年は参加者も多く、若手の報告・参加もあり充実した分科会だった。レポートは4本、以下の通り。

- (1)加藤報告「アメリカの西部開拓と北米先住民」
- (2)山本報告「近くて遠い隣人—在日として生きること」
- (3)早大学生報告「世界の高校歴史教科書を分析する—朝鮮戦争を切り口に」
- (4)小橋報告「古代東南アジア海域世界を考える—インドネシアの歴史教科書から」

分科会では、「討論の柱」を、テーマ①子どもたちが主人公となる授業実践をどうすすめるのか？

子どもたちが身近に世界を感じられる実践をどうつくるのか？ テーマ②国際交流、現実の国際社会への関心をどのように発展させるのか？ というように設定し、討議を進めた。

テーマ①については、各報告で、「子どもたちが主体的に世界を感じとる授業をどうつくるのか」

---

「世界認識を共有できる授業実践をすすめるにはどうすべきか」を具体的な事例をもとに議論できたと思う。また、加藤報告・早大学生報告とも20代若手の報告でフレッシュな議論ができたと思う。テーマ②については、山本報告・小橋報告によって、朝鮮半島やインドネシアの理解と交流について討議ができたと思う。

各レポートについて述べると、

(1)加藤報告は、アメリカの領土拡大と先住民の歴史について、4枚の図を使い班別で話し合い、発表させた授業実践である。生徒に、4枚の図版の時代順を考えさせ、一つのストーリーをつくらせる。班ごとに話し合い、発表させる。少ないヒントの中で生徒はいろいろと考え、ストーリーを導き出す。時代順があっていたか、あっていないかではなく、自分たちが持っていたイメージと他の班の何が違っているのか、何が同じなのかをチェックさせる。まとめとして各図版の解説を行い、自分の抱いていたイメージとどこが違うのか、同じなのかを記入させ提出させる。生徒の想像力に依拠した優れた実践である。加藤氏の勤務校では、通常、受験を意識した講義式の授業が行われる。授業進度に追われる中で、「生徒が自分の言葉で歴史を語れる」授業をしたいという思いが伝わってくる授業報告である。

(2)山本報告は、高校1年生の「地理B」と高校3年生の「地理A」の授業実践である。山本氏は、「世界で今何が起きているのか」がわかる授業をめざし、できる限り最新の新聞記事資料や映像資料を活用し、能動的・主体的な学びを促すために参加型学習、クイズ、実物教材の持ち込みなどさまざまな手段を使う授業を理想としている。しかし、同時に地理学の系統性の構築を失わない編成をとられている。本報告も、「地理B」では、全6時間を「朝鮮半島の自然」(第1時)、「東アジアの人々と文化」(第2・3時)、「日本と朝鮮」(第4時)、「在日韓国朝鮮人問題」(第5時)、「北朝鮮問題を考える」(第6時)と、系統性を維持しながら生徒に考えさせる授業を展開している。また、高3「地理A」では、生徒の母親でもある在日韓国女性をゲストスピーカーとして迎えた授業の記録、それに加えて当時の生徒(現在大学1年生)、ゲストとその子ども(同生徒)から、この授業について行った聞き取り調査の内容をまとめた意義深い実践報告である。自然、歴史、政治、日本との関係などを通して朝鮮半島を多面的に理解すること、同級生の母親という比較的身近な存在から「在日」としての生をリアルに見つめることができる優れた授業である。

(3)早大学生報告は、「朝鮮戦争」についての記載を、日本の教科書3社と、独仏共通、ロシア、アメリカ、中国、韓国、朝鮮学校の教科書とを比較分析したレポートである。分析の視点として①冷戦と朝鮮戦争の関係が正しく記述されているか、②内戦と国際戦の両方の性格が描かれているか、③アメリカの関与を正しく評価しているか、④日本の関与の事実が書かれているか、⑤核兵器使用について触れているかの5点を設定している。詳細な分析の後、各教科書の視点・「癖」に気づき、さまざまな視点から物事をみることの重要性を知る、これを歴史認識のスタートにしたいという若い世代の情熱が感じれる。「歴史の本質」を多角的な視点から生徒に伝えることを教師の卵たちが認識した刺激的な報告である。

(4)小橋報告は、氏が長年培われてきたインドネシアとの交流を土台とした報告である。在日インドネシアの女の子から借りた教科書を元に、ムスリムの多いインドネシアでは、イスラム教の押しつけや正解を見つける歴史・倫理の授業はまったく行われていないこと、むしろ、日本の道德教育こそバイアスがかけられた偏った教育であることなどが語られ、とても新鮮であった。私たちは、日常生活に正解を押しつける授業を展開していないか、考えてみる必要があるだろう。(文責・鈴木久雄)

## □平和と民主主義

本分科会の報告者と報告タイトルは以下の通りである。

- ①池田恵美子「戦争遺跡とNPO活動」
- ②小林光代「中学校教科書採択から見えてきたこと」
- ③末永明「高校生は浜岡原発についてどう考えたか」

---

④小藪崇明「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の歴史」

⑤白鳥晃司「杉村楚人冠と「牧場の朝」」

まず、池田報告であるが、私(小藪)はNPO法人安房文化遺産フォーラムの活動について、歴教協や館山でのフィールドワークにて何度も聴いている。にもかかわらず、何度聴いても飽きず興味深い。その理由として、同会の活動は、①「日本史」のなかの一部の「地域」史ではなく「地域史」からこれまでの「日本史」では描かれなかったことを描いている点、②歴史の掘りおこしと町おこしが平和学習としてつながり(単なる観光事業ではなく)地域の活性化をめざしている点、③毎年活動の情報が更新される点があげられる。今回は、フォーラムに若い学生がボランティアとして集まる話や、その中の一人がウガンダにあるアワミナミ洋裁学校(支援活動により2001年設立)を見学した話、かにた婦人の村(婦人保護施設)を設立した深津文雄牧師を卒業論文のテーマに取り組む学生の話等、若い人にも活動の影響が大きい点が印象的だった。

次に、小林報告であるが、昨年夏の新教育基本法・新学習指導要領下の初の検定による中学校教科書採択の問題を取り上げた。新教育基本法・新学習指導要領のもとでは道徳教育や愛国心を学校の教育の要として、教科に関係なく教育活動全体を通して行うようになったと指摘した。私にとって興味深かった点は、理科の教科書でも月の満ち欠けの問題に芭蕉の句を、光の屈折の問題に金閣寺をわざわざ登場させたりするという話である。教科書問題というとかく社会科に目を向けてしまうが、それだけでは足りないようである。議論では、「教員が教える立場で中立というのをおかしいのでは」という指摘が出たが、この議論を広げると自由社、育鵬社の教科書を批判する内在的論理(例えば愛国教育に対抗する平和教育)を根底から問う必要があるのではないかと感じた。また自由社、育鵬社の比較に日本文教出版の公民教科書が上げられていたが、同教科書のキャラクターは「鉄腕アトム」であり、このキャラクターを3・11後の人たちにはどう見えるのだろうかと思った。

次に末永報告であるが、東日本大震災の原発問題という時事的な問題を高校地理の授業実践へ取り入れた内容だった。そこでは浜岡原発周辺の地形図を利用して、いかに原発は津波に弱い環境にあるかが説明された。実際に地図を見ても原発の立地の危険性がうかがえる。私にとって興味深かったのは、福島原発から千葉市のほうが岩手県の遠野市や釜石市あたりよりも近いという点である。風評被害の問題は被災地＝東北全体という認識のもとに起きており、私を含め多くの首都圏の人たちの地理感覚はいかに「東北」を排除しているかがうかがえた。授業後の高校生の反応を見てみると、なぜあの立地に原発はつくられたのかという疑問があったが、そのような質問にどのように教員は応えたのかと思った。おそらく、このような質問に答えるには歴史的なアプローチが必要なのであつて、地理－歴史という教科は現代社会の問題を考えるためにも不可分のだろうと思った。

次に私は「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会」の歴史について報告した。特に、千葉県の虐殺事件を明らかにした『いわれなく殺された人びと』(青木書店、1983年)以降の、同会による遺骨の発掘と慰霊碑建立の活動について、会報『いしぶみ』を資料として検討した。議論では、虐殺の実態レベルの質疑が多かったが、なかでも朝鮮人を助けた人はどうだったのかという質問があった。私としては安易に助けた人の話をするのは、多くの「日本人」が虐殺したけれど、良い「日本人」もいたということで、虐殺が相殺され軽んじられることに不安を覚えると答えた。また、歴史学者の山田昭次は、近著のなかで思想以上に実際に朝鮮人と付き合いのある人が朝鮮人を救ったと論じていると紹介した。私自身も山田の意見に首肯できるが、一方で、出稼ぎで下層労働に従事していた朝鮮人が、同じ下層労働者の日本人に虐殺された事実がある。そこから、助けた日本人はどのような形で朝鮮人と付き合ったか、緻密な実態分析が必要であろう。その点は私の今後の課題としたい。

最後に白鳥報告であるが、報告者が長く丹念に研究している杉村楚人冠についての報告だった。楚人冠は明治から昭和にかけて東京朝日新聞で活躍した記者である。昨年11月我孫子市に杉村楚人冠記念館が開館され、朝日新聞でも千葉・地方版で楚人冠に関する特集が連載された。報告では文部省唱歌「牧場の朝」の作詞者が楚人冠だとした上で、「牧場の朝」に託された意味を、類似点の多い作品である随筆集『湖畔吟』の「霧」という作品から、「厭なこと(＝圧迫され

---

る)から、言論人・楚人冠は解放されたいと読み解ける」と分析した(「朝霧のひどい日は、必ず後にからりと晴れるのもうれしい」…「霧」より)。「牧場の朝」の舞台は楚人冠が1910年に訪問した福島県岩瀬郡鏡石町の「岩瀬牧場」であり、報告者はそこから楚人冠の東北への視線(記事「雪の凶作地」)が現在の3・11以降の考えるヒントになると紹介した。多くの作品を丹念に読み解き、さまざまな推論を重ねる点が私には興味深かった。(文責・小園崇明)

## 現地実行委員会の議論から

柄澤 守(実行委員会事務局長)

今回は第5回・第6回実行委員会の様子をまとめてお知らせします。なかなか決まらず気をもんでいた全体会の講演者がようやく内定しました。東京大学の高橋哲哉さんです。高橋さんは、平易なことばで現代人の生きる指針を語る民主主義の立場に立つ哲学者としてみなさんをご存知だと思います。今年『犠牲のシステム—フクシマ・オキナワ』を集英社新書から出版され、今回の講演を引き受けていただいたメールにも「フクシマの問題を歴史的にどう捉えるか、歴史認識問題などとも関連させて話ができればと思っています」と書かれています。被災地であり、ホット・スポットもある千葉に住む私たちにとって、原発問題をどうとらえたらよいのか、そしてこれからどうしたらよいのか、展望がみえるお話が聞けると期待しています。チラシなどを使ってどんどん宣伝していきましょう。

地域に学ぶ集いと現地見学についてはほぼコースが確定しましたので、これから各支部で細かいプランと資料の準備など具体的な作業に入ってください。本部からプレコースが5つと多いことや集合時間が社員総会と重なることについて再検討を求められましたが、基本的に原案通りで計画を進めていこうと思います。この件は、本来のコースで考えていたプランが、公共施設が開かないためにプレに移動して発生した問題ですから、現地見学を月曜に設定する以上避けられないものです。これは、千葉だけの問題ではなく、今後の大会に向けての教訓といえます。

3月上旬にエントリーが締め切られる分科会レポートですが、千葉県からは現在42本が確定しています。これだけのレポートが短期間でそろうところはさすが千葉県歴教協です。

さて、これからの最大の問題は参加者の確保です。さきに目標1200人と掲げましたが、これを達成するためには、県内で少なくとも半数の600人を集める必要があります。現在の県会員は100名強、ボランティアを含む学生を100名集めたとしても、会員以外の教職員と市民をあわせて400名近くに全体会・分科会場へ足を運んでもらわなければいけません。当面、各支部で誘う人のリストを作成して目標を決めてください。それぞれ事情があると思いますが、単純に支部数で割ると各支部50人です。かなり気合いを入れないと目標達成は難しいことを認識していただきたいと思います。会議で三橋さんが言っていたように、いきなり雲をつかむような拡大策に走るのではなく、まず最近支部に結集できていない会員に声をかけていくことから始めましょう。身近な人に仕事を手伝ってもらい、原稿執筆を依頼する、実行委員会に加わってもらいなど、細くても網の目のようなネットワークをつくるのが大切だと思います。

大会の準備をスムーズに進めるために、これから実行委員会を月2回開いていきます。基本的には第2土曜日と第4日曜日に行います。お忙しいと思いますが、大会成功に向けてぜひご参集ください。

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。  
chibarekkyo@csc.jp  
また、職場や地域のことなどもぜひご投稿ください。(M)